

鳥羽院政と平忠盛

安田元久

今日はこんな大きな問題を掲げましたけれども、実は鳥羽院政全体、それと平忠盛の關係といったような大きな問題を申上げるつもりではなく、鳥羽院政期における一つの武力の担手としての平忠盛のあり方、この時期の院政という一つの政治権力が平忠盛に代表される武力をどのように使ったか、というところを画していわば問題提起というわけですが、一つの問題を考えてみたいといふのが主眼であります。

初めに、具体的に鳥羽院政と平忠盛ということに入る前に、私がこのことに立入るに際してどういうところに向題をもって、鳥羽院政下の平忠盛のあり方をみていきたいかということを一寸述べます。いわゆる院政と呼ばれる政治形態、このもとで日本の国家が一体如何なる軍事制度をもっていたのか、これはまだはっきり集約的に結論が出されていない問題と思いますが、特にこの国家権力の基礎となる中央の軍事力、これはどんなものであったか、その軍事力の構成はどうして行われたか、そして更にその中央軍制というものは国家権力の歴史の發展

途上でのどのような性質をもつか、勿論私がここで扱いたいののは八世紀・九世紀ではなくて早くても十世紀、大体十一世紀以降のことを考えております。それ以前の向題については色々と考え方があつたし、また私の専門の外なのでここではあえていたしません。また、大体院政が始まるのは十一世紀でありますから、この頃に中央軍制といふのが一体どうであるか、と同時に國家に、一つの國家権力の歴史という發展の過程で、中央軍制といふものが何時如何なる時点で確立しているか、或は一層確立しそれがまた消え去り、また確立し、また生れるものであるか、こういう問題もあります。更に具体的にいいますと、たとえば平氏政権、これはあくまでも平氏の武斷的專制政治です。更には鎌倉武家政治が続きますが、これらの時代、これらの政権のもとにおけるいわゆる兵馬の権の掌握者、これによる政治が行われます。こういう平氏政権乃至は鎌倉政権といふのも見方によつては一つの軍事的國家といふことがいえましようが、そのような軍事的國家体制、これが院政期の軍事体制のなかでどのよ

うに準備されたか、当然平民政権或いは鎌倉政権も、それに先行する院政時代の軍事体制と大きい意味では何らかのかわりがあると及ぼければなりません。併しその場合にどのような形で準備されていたか、この点も矢張り重要だと思ふわけです。

しかもこれらの問題は、院政と呼ばれる貴族政権、そこに存在した國家權力の性格規定の問題ともかかわり合ふわけです。即ちこの時代の國家形態を一体如何なるものとしてとらえるか、それはあくまでも古代的な統一國家の變形したものであるという見方もあります。しかしまた、初期的封建關係への移行形態、その形態をいかに政權であるということも考えられます。はたまた、この時代こそ日本における全国的な中央集權的統一國家、幕府による中央集權的統一國家の完成した時期であるという見方もあるのではないか、こういう疑問が色々出ますが、この解決に至る一つの道程として矢張りこの時期の中央軍の体制といったものを考へて及ばないと思ふわけがあります。

ところで、この軍事制度を考える際に、中央軍制ばかりでなく地方軍制の問題もまた重要であります。これは本日は省略させていただきますが、既に地方軍というと普通國司が組織すると考えてよいのですが、この國司軍とか或いは地方の豪族が組織している一つの武力組織、この二つものもあります。國司の軍と地方豪族の武力組

織、これらがどういう相剋關係にあるか、そういうことも考えなくてはならないのですが、ここで地方軍の問題は一応除外しておきます。

それでは、私がここまでの中央軍とは何か、中央軍にのいての意味を明らかにしておかなくてはならないわけです。私は先づこういう立場から行きたいと思ひます。

いわゆる軍事制度というものと警察及び檢察制度、これは一應分離して考えたい。勿論實際の力の発動の場面では軍力と警察力とは密接につながる。これは歴史上そういう事實は一杯ございしますが、しかし兩者は概念的には一応別個のものであると考へます。さらに中央における軍事制度、これには先づオ一に政治權力者乃至は中央政府の構成要素團を直接に包摂する、直接に警備するといふ役目をもつもの、それはいうまでもなく親征軍であります。この親征軍は日本の場合には、さほどの警察及び檢察制度と密接に、特に律令体制下においては密接につながっていると思ひますが、首都の警察軍、治安維持を職能とする警察軍、これは親征軍と密接につながります。そしてもう一つ、中央の政治權力を外郭における反政權の力に対して防衛すべき軍事力、即ち狭い意味での中央軍、これがもう一つの範疇として出てくるわけです。この一環後のもの、これが政上における中央軍であつて、特に白河院政、鳥羽院政のいわゆる前期院政の時代に、そのような中央軍の体制が一体存在したかどうか、それ以前の軍

制のあり方をふまえた上で、白河・鳥羽院政の時代に果してまきほど申上げた意味での中央軍が存在したかどうか、こういうことが一つの問題点であるわけである。

併し、この軍制上におけるこういう区分ですが、これはより具体的に追求しますと、そこにはまだ種々の問題が表れて、いま申上げたような区分を一つの前提として考えてゆくこと自体にも勿論疑問の余地はあると思います。そこで予め問題の所在をふした上で、具体的な内容に入りたいと思いますが、この問題の所在として、私は先づオ一に、一般論として統一國家においてその軍制は必ず中央軍と地方軍という形態で整備されるものであるということとです。これは日本ばかりではなく、隣りのたとえば中世期で考えますと高麗の場合、或は唐・宋の場合も考えなければならぬのですが、勿論中国大陸とは日本は地域的面積からいっても問題なく違いますから、もう單なる比較も出来ませんが、日本以外のところでも考えなくてははいけません。しかしとも由中央軍と地方軍という形態で必ず整備されるのか、特に親衛軍と呼ぶ場合とどう異なるか、このことも一応頭に入れておかなければならぬ。

オ二は、政治権力者は必ず親衛軍をもつてであることが、統一國家としてその又で十分であろうかということ、特に古代末期の日本ではどうだったか、まきほど申上げた院政期特に鳥羽院政期の日本ではどうか、これが必ず

しも明らかでないわけですが、これも一つの問題です。

オ三に、若し中央軍、地方軍の併制が統一國家に必要なものであるならば、古代末期の日本は果して統一國家の名に値するのか、即ち中央軍が若しなければ統一國家といえないということになります。寧ろあつた衛府の制度、六衛府の制度、これは親衛軍の制であります。また檢非違使というものもあつた。しかしこれは首都の警備軍にほかならない。

オ四に、そうなれば中央軍というのは一体何であろうか。少くとも地方の反乱とか反抗とかいふものを鎮圧するための出動、これを一つの機能としていなければ中央軍とはいえないのでないか。常に中央にいながら一つの集團として地方の反乱を鎮圧に出てゆく、そういう形、そういうものがなければ中央軍の存在は肯定できないという風に考えるわけです。

そのような機能をもち中央軍が日本の場合に存在するかどうか、或は恒常的に設置されたものでなくともその機能をもちものはあつた筈であります。たとえは、隣の朝鮮半島の場合には、高麗の時代に明らかに地方軍と別にまた親衛軍とは別にいわゆる中央軍があつたことは、あちらの専門の研究者の業績によつてよくわかつておりますが、その中央軍というものは、あくまで今私の申しましたような機能をもちていた。この高麗というのが、果して封建國家なのか古代國家なのかとすることは一応別として

ても、とも角中央軍をもつていて、しかも集権的統一國家として半島全体をおさえていた高麗の一番盛んな時期ですが、そういう事実はあるわけです。

以上のようなことを考えながら、鳥羽院政と平忠盛の關係といいますが、その時期のことを少し考えて行きたいわけです。ここで勿論皆さん殆んどご承知のところと申しますが、今の観点の上から、矢張り一応鳥羽院政と平忠盛の關係、歴史上の事実についておさえておかなければならぬ、こう思うわけです。

大体この伊勢平氏というものの武名は十二世紀の中期、私が中期というのは一世紀を三つぐらいに分けますから、十二世紀の中期といえ、一三〇年ぐらゐから一六〇年ぐらゐと考えていたければよいわけですが、この時期に入る頃、即ち一三〇年頃には非常に忙しかまっております。それは即ち忠盛の代であります、この頃にはいりゆる南都とか北嶺とかいわれるものの僧兵の横暴が非常に激しい。一方、瀬戸内海を舞台に海賊の跳梁は活発となつていたといわれます。これは事実としてあるわけですが、こういう僧兵の強詠に対する防禦、或は海賊追討のために、平氏の武力が利用されたということであります。

その頃十二世紀の中期に入る頃は、既に白河院政は終つて鳥羽院政がはじまつてゐる。鳥羽院政の始つたのが大治四年（一一二九）ですから、丁度その時期ですが、

この鳥羽院政のもとでは、これも周知のとおりであります、嘗ての院側の近臣、院の側近の実力者が、嘗て白河院政時代に榮えていたものが多く斥けられる傾向があります。鳥羽院政というのは、鳥羽上皇は何かにつけて白河院政に対する反動的政治をやつておりますので、従つて側近の実力者についてもそういう交代があります。しかし、平忠盛だけは依然として上皇の信任が厚く、院の側近の地位を失つておりません。それは一つには、たとえ白河院に非常に重く用いられた平氏であつても、鳥羽院政の時代平氏に代るべき武力が他になかつたということ、そのためにこれを遠ざけることが出来なかつたとも考えられますし、一方皆々当時の舊族の日詰などをみますと、忠盛という人物が非常に要領のよい人物であり、しかも非常に能力があつて、それを裏付けとして政界を泳ぎ廻つた、非常に巧みに泳ぎ廻つたといわれておりますので、その結果、鳥羽上皇との關係がそのまま維持されたとも考えられます。

この忠盛ですが、長承元年（一一三二）のこと、當時備前守であつたわけですが、上皇御願の得長寿院の造營の成功をやつておりますが、その成功によって但馬守になります。更に刑部卿に拔擢され、内の昇殿を許されます。これも有名な話ですが、武士出身の者として初めて内の昇殿を許されるわけです。この内の昇殿というのは上級貴族のもつ特権でありますから、當時の上級貴族達

はこの昇殿を「未曾有の事なり」といつて批評しております。批評というよりは非難をしております。しかしこの武勇の家としての地位、これは最早確固としておりますので、その実力と鳥羽上皇の強引な庇護もあつたと思われ、それによつて中央政界に進出し、忠盛でありますから、この貴族達のそのようには非難というのも、所詮は時の動きをよく諷刺とれなかつた、いわば時代認識の不明さをもつた貴族達自身のあり方を暴露したにすぎないと私は考へるわけです。

有名な話ですが、『平家物語』などに、忠盛が殿上で貴族達から「伊勢の瓶子（平氏）は素癡（へちま）なりけり」といつて笑われた話があります。これはおわかりの方が多いと思ひますが一寸註釈しますが、瓶子は甕です。これと平氏をかけたゐるわけです。素癡とはぬってない甕です。これは要するに伊勢平氏の忠盛をからかつた言葉でしょうが、それから殿上で忠盛を面討ちにしようとして、大々殿上では刀を抜いてはいけない筈なのですが、かえつて忠盛が薄暗いところで銀箔をぬつた木太刀を一寸抜いてゐて貴族達を震えあがらせたというような、いわば奇智を働かせたという話もあります。どこまで本当かわかりませんが、貴族達が伊賀・伊勢地方の在地武士から成上つた者達の榮達に對して可成りの嫉みをもつていたことは事実であるし、今のような話も、恐らくつくり話とはいへず実から出て来たものであろう。ですからこの時期の忠盛の立場をよくあらわしている説話と思ひます。

少し後の話になりますが、この忠盛が仁平三年（一一五三）

に死にます。この時に藤原頼長はその日記で「宇根抄」にこういうことをいつております。「教國の吏を経て富を累ね、奴僕面（に）満ち、武威人にすぐし」と。このように評しております。即ち「教國の吏を経て」というのは教國の國司を経てです。「富が巨万を累ね、」恐らくこの時代隨一の富をもつた人間だつたらしいと思われます。「奴僕が面に満ち、」これは家人達が國中に満ちてゐるといふ、恐らく表現はオーバーでしょうけれども、武威が人にすぐれてゐると、こういう風に評してゐます。ですから、忠盛が晩年に非常な富と勢力をもつていたということがわかるわけです。

このように忠盛の榮達、それが何程もいふ通り彼の武力を背景として実現したことはいうまでもないことです。それでは、その武力はどのようにして形成され、また強化されたものであるかといふと、箇所にいへば、その武力を使つて西海地方の海賊などを討伐する、追討することによつて、またその地方に勢力を扶植するといふ形で雪隠摩式に武力を大きくしていったに違ひないのです。先ず十八戈のとき、また父正盛がおりますが、永久元年（一一一三）三月に夏焼大夫といふ盜賊が日吉神社の神人と共謀して盗み働きをしたことがあります。忠盛はこの時僅か十八戈のときですが、検非違使としてこれを討ち

とったという記録が『長秋記』、『殿暦』などに残っており
ます。即ち若くして武技にすがれてゐたことがはつきり
していますが、この頃恐らく父の正盛と共に盜賊の逮捕
とか僧兵の鎮圧などに武功をあげてゐたと思われま
す。また保安四年（一一二三）十月には、彼が延暦寺の僧兵
を鎮圧したということがあつて、その功績によつてこの
時は越前守と稱つております。

しかし、忠盛の武功として顯著なことは、このような
京都及びその周辺の警護といつたものではなく、むしろ
西海・南海方面の海賊討伐にその武力を發揮した特徴が
あるのではないか、時代が丁度そういう海賊が動き廻る
時期であつたということもあるでしょうが、忠盛の動き
を考へておきますと、南海・西海の海賊討伐といふことが
一つの特徵であります。

大治四年（一一二九）に山陽直・南海直にまたがつて
凶賊が數十艘の舟を連ねて横行してゐたといふことがあ
りますが、この兩道の国司産はいずれもその智をおそれ
て追拂することが出来ない。ために凶賊がますます益威
をふるつたと記録されております。そこで忠盛が、この
時も追捕で命ぜられたわけですが、この時代の海賊とい
うのはいうまでもなくその地方に成長した土豪、在地武
士、こゝろいう者達の集團であります。勿論国司の命令を
無視したり、官物を押し取つたり、治安を乱したり、い
わゆる中央政府からみて治安を乱すという行動をしてい

るために、中央政府からは凶賊とみられたわけですが、
実際は新興の在地武士達、特に西海・南海地方ですから、
当然水軍を擁しております。船で瀬戸内海を舞台に横行
するわけですから、それから、そういう地方の武士勢力を討
伐するためには、それ以上の強い武力が必要であります。
武力の裏付けがなければ、単に朝廷の權威だけで、朝廷
の命令だけでこれを討とうとしても、到底鎮圧出来ない
状態であつたわけです。この海賊の追討使に忠盛が任命
されたことは、彼の武力が既に一一九二年時代盛大であ
つたことを示しております。この時期には既に平氏の勢
力、武力が強力であると同時に、平氏の勢力が父正盛、
子忠盛二代を通じて、矢張り昔からいわれている通り受
領を歴任するとか色々のことがあれば、當然その地方に
勢力の扶植が行われます。忠盛のこの時代には、西海地
方に可成り平氏の勢力が浸透してゐたといふこともいえ
るわけで、彼自身が率いてゐる武力の強さと、平氏その
ものの勢力といふか西海地方に対する平氏がつてゐる
いはば目にみえない強さ、それから勿論その地方に平氏
にはつきりと家人關係といふところまではいかないと思
いますが、矢張り支配被支配の關係をもつ在地武士達が
たんに／＼にひろがつてゐた、とこの二つのことが前提と
ならなければ、彼が海賊追討に起用される筈もないと思
うわけです。

ところで、この海賊追討の成果は、実は史料上では明

らけでなく、論功行賞も行われていたのです。そのために、実は追討に値するほどの海賊ではなかったのではなか、そういう存在がなかったのではないかと疑う人もありますが、この頃の西海、南海は、当時の東国と比較すれば規模は小さいとはいえず、矢張り中小武士団は成立していたし、彼等が提携して水軍を形成していたことは勿論一般的に考えられるので、海賊そのものの存在を否定することは出来ないのです。むしろ可成りの實力をもっていたからこそ、平氏がそれまでに掌握し組織していた自らの武力を背景としてこれら海賊を討ち、同時にそれによってその海賊といわれる中小武士団を積極的に掌握しようということすらやっていたことが十分想像されるわけです。というのは、これから述べますが、もう一つの著名な例があるわけです。

それは、保元元年（一一三五）忠盛が再び海賊追討をしたという史料が残っています。この際には非常にはっきりした史料があつて、海賊隆延の知らせが京都に伝わりますと、まづ追討使の人選について、岡白忠尚の屋敷で評議が行われます。平忠盛、源為義の何れを起用すべきかの論議がありました。『長秋記』に書いてありますところによりますと、この時多くの人は「忠盛は西海に有勢の聞えあり」との理由で忠盛を支持したといわれております。また『中右記』の伝えるところによると、この時鳥羽上皇の意見として「為義を置わさば路次の国

國自ら滅亡するか、忠盛朝臣置しかるべし」と。この鳥羽上皇の意見であつたといわれます。勿論、上皇は忠盛を信頼していたといふことはわかりますが、同時にこれらの発言の内容から、当時の海賊追討の実態といふことがうかがえるのではないかと、即ちその地方に勢力を及ぼしている者を派遣することによって、大きな抵抗も与へず鎮圧することが期待されている。逆に、その地方に無縁の武將が行けば、かえつて抵抗を大きくし、混乱を増し、路次の国々が滅亡するといわれるほど、そういう恐れすらあつたといふ事実です。そこで比較された忠盛、為義は、その個人的力量において比較されたのではなくて、矢張り西海に有勢であるか否かの条件において明らかにならなかつたといふと解してよいのではないかと思います。このようにこの時点では、忠盛の西海地方における勢力の強大さが既に京都に喧伝されていたことがわかるわけです。

このとき、海賊追討の実情についてももう少し見てみますと、追討に向つた忠盛はその年の八月に日高禪師といふものを始め七十人の海賊を捕えて京都に帰つております。これははつきり凱旋してきたといふ記事があります。このとき京都の人々はみな車を出したり直に並んだりしてこれを見物しておりますが、嘗て父の正盛が平氏の武力を京都に示すきつかけをつくらぬにあらぬ為義親直討から帰つたとき、京都の人々が熱狂して、れを迎えと

ありますが、それと全く同じように忠盛は、京都の人々に海賊を討つたというだけのことと熱狂して迎えられます。しかし何となくこの史料をみますと、この凱旋には正盛のときもこういう奇怪なことがあります。というのは本當に義親の首かどつかということは最後まで疑われておりまして、この正盛が義親を討つて凱旋してから數十年後までも義親と称する者が方々に現われていたりということがありますが、それに似たようなこと、いわば武威を示すための自己宣伝のためにわざと誇示したといふような痕跡が正盛のときにあるのです。それと全く似たようなことがこの忠盛のときにも記録に残っておりまゝす。この時その史料によりまゝと、忠盛は白高禪師以下のおもむいた者を檢非違使に引渡しましたが、残りの賊は同道から京都へ入れたといわれています。即ち正面からまともに檢非違使に引き渡してはいないのです。そのために一般の人は、彼が捕えて来た者の多くは本當の賊ではなくて、西海地方の武士であり、まじ忠盛の家人となつていない者を捕虜に仕立て、本當の賊として悪事を働いたものでないものも含めて、捕虜の數の多いことを誇示したのではないか、そういう評判が忍ち凱旋の日にひらまつております。このことは『中右記』に詳しく述べてあります。

さきほど申しましたように、当時の京都の人々が賊と呼ぶものと地方に成長した武士との區別、これは本質が

りいえは同じものですが、ただ賊と呼ぶからには、何かそれだけの、たとえは耳責を掠め取るとか、国司の命に従わないとか色々あるでしょうが、そういう罪状は別としても、もと／＼兩者の間は甚だ曖昧なものである。それにしても忠盛が武功を誇るために多くのの人々をかり集めた様子、これがとも角うかがわれるわけです。しかもいま申しましたように、忠盛の家人でない者を賊に仕立てるには、それを彈制し得るだけの實力がなくてはならない。それ相應に彼の家人であつた在地武士が既に西海地方に多く存在しなければならぬわけです。そういう力がなければ勝手に家人でないものをのつかまえて来て捕虜に仕立てることも不可能な筈です。ですから、さきほど述べました彼が死んだと言へば述べた。奴僕が國に満ちたという表現、これはまさに事實であつたろうと思ひます。そのようにならば西海地方に勢力をもつ忠盛であつたにござい、この地方の海賊を容易に追討し得た。この日高禪師を首長として蜂起した賊徒は、国司の命令に反抗し、付近の在地武士達を糾合してその勢力を増大して行つたものと推定されるし、そのために海賊蜂起の報せが急遽京都に伝えられたのであると思ひます。しかし、この西國に勢力を張つた忠盛自身が現地に赴くといふことによつて、國司に代表される國家權力への反抗を試みた在地武士達の多くは、むしろ戦わずして脱落し、結集された武力がまたたく間に崩壊する。こういうのがこのとき

奥情であつたと私は考へるわけです。

即ち朝廷は、西海に有事である忠盛を送討使に任命することによつて、西海の海賊を鎮圧することに成功し、表面上は朝廷の權威を示すという結果を得るわけです。従つて世間の評判とはかかわりなく海賊追討の恩賞を行う。形式的には勿論追討の論功行賞を与えますが、忠盛の嫡子清盛がこのときの功によつて従四位下兵衛佐となつた。これは有名無実であり、併し、今申しました通敵追討によつて形式的には朝廷の權威の発現に成功したとはいへ、朝廷は實際には忠盛と西国地方の在地武士との私的支配關係、主従關係をつくりあげ、それを強化せよという機会を与えていたということが注目しなければならぬわけです。これらの海賊追討によつて、忠盛はまず、西国地方に勢力をもち、その経済的地盤を拡大するというわけであり、忠盛が西国地方の在地武士達を支配下におさめるといふこと、これは彼がこの地方の武士団を大きく統合して武門の棟梁の地位につくことを意味しております。しかしに忠盛は西国に有勢力の武将として西国武士の多くを家人とし、武士団の統合を進めていたと推定されます。こういう面ははっきりとした史料の裏付けはありませんが、そのように推定されます。しかし忠盛及び平氏一門について、在地武士の家人化の過程とか武士団の統合の事情、これを示す史料は左いわけですが、しかし何れにしても推定としては、在地武士の

組織化の動きといふことは當然あつたといふ風に私は考へるわけです。

そこで、このような忠盛、鳥羽院政下の忠盛、これの存在をここで改めて考へてみます。即ちさきほど申しました院政の軍勢力という側面からこれを考へてみるわけです。鳥羽院政のもとにあつても勿論北面武士といふものは存在します。これは一種の親征軍だと思われるわけです。また官制としての検非違使もあつて十分にその機能を果たしております。制震の上からはまさに警察軍といふの親征軍は存在しているわけです。内容的に考へますと、これらの武力、その構成が、鳥羽院政以前の巨とえば白河院政或は摂関時代、この時代と同じくこういう検非違使とか北面武士といわれるものは一体どういふのが、といふと、当時都の武者或は京武者などと呼ばれる人々、要するに京都に出ている武士、こういうものが構成要素であつたといふことも確かであります。しかし今や、院の近臣の一人となつた平忠盛、これに率えられる武力集団といふものが一つの存在していたことは既におわかりと申します。この武力集団は、これらの天皇や上皇の親征軍乃至は都の警察軍の制度である検非違使とか北面武士とは現實において一応別個の存在として把握しなければならぬと思われれます。忠盛は最早、院の北面武士の一翼ではなくて、一つの独立した武力集団の棟梁である。これも確かであります。譬て先ほど述べましたが、

義親追討から凱旋した平正盛を執任して迎えた京都の人々の目は、その時既に一つの独立した私兵集團としての平氏武士団の姿を認めなければなりません。忠盛の代には、それは更に成長し強力化した、その独立した私兵集團が強力化していたということを認めざるをえないわけです。

しかも、その武力集團の棟梁の忠盛という者が、鳥羽院政々権の内部に密着している。院政権力を支える有力者の一人であったわけですから、この忠盛の武力が、そのまま院政の重要な軍事力としての機能をもちに至っている。これも否定出来ないことでしょう。同時に鳥羽院政体制は、一つの固定した軍事力の制度を事実の上では確立していたということもいえるわけです。即ち固定した軍事力の制度とは、その実態としては平氏の私兵集團です。棟梁は院政と密着している忠盛であるから、それ自体院政の権力を支える武力として機能を果しているわけです。

今まで述べました南海、西海の海賊追討における忠盛の武士団の果たした役割、それとその動きの中から私は今申し上げたいことは十分理解出来ると思います。この時点において鳥羽院政権というものは、一応の中央軍の編成をもちえたもの、事実上中央軍の編成をもちえたものと考えざるべきではないか、こういう風にみるわけです。

忠盛の武士団が、平時には法皇とか天皇の警護に任じていたことは勿論であります。また僧兵の強訴を防禦する主力であつたこともいふまでもない。それだけのことをめれば、親軍乃至警衛軍のように交えますが、しかし彼等にはもう一つの地方の反乱とか擾乱とかを鎮圧するという別の機能が加えられていたことに注意したいわけです。これこそがその政權を維持する上で重要な軍事力の中の中央軍、これの複型に属するものではないか。全国統一政權としての鳥羽院政が漸く中央軍の体制をもちえはじめた統一政權である。鳥羽院政のときになつてはじめて全国的統一政權となりえなうと思ひます。

少くとも九世紀以降十世紀、十一世紀には可成り統一という側面では日本國中がまだ非常にルーズな掌握のされ方をしていたと思ふが、この鳥羽院政の時期には莊園体制或いは國衙体制を置いて、直接に現地の在地武士乃至農民、他のいい方をすると、直接に莊園領乃至國衙領を掌握する。こういう動きが別の面から及んでも証明されるわけですが、それと平行してこの時点で全国的統一政權として出来上つていたということが、この中央軍制が既に出来て、事実上中央軍が存在していたということからも推定されるのではないか。こういう風に考えるわけです。

その中央軍の編成は必ずしも忠盛の武士団が唯一のものではなかつたでしょう。先ほど源為義の名前が出て来

すしたが、これらも或いはそのような機能かも知れませんが。併し概してその最も有力な平氏武士団、これを中核として中央軍が編成されるということは疑問の余地がないと思ひます。

この中央軍の編成の事実は、少くとも律令的軍制の崩壊以後、鳥羽院政時代以前における地方の反乱とか擾乱の鎮圧に際しての軍事力の使用形態と比較しますと可成りはつきりしてきます。一々例をあける時向もございませんが、例えば十世紀段階或いは十一世紀段階、細かいことを申上げれば、例えば十世紀段階の中央軍の構成は、私のいう意味の中央軍といつてよいかどうかわかりませんが、とも否中央から地方の反乱などを鎮める時に使われる武力は、大まかにいえば先づ、追捕使を任命する、そして諸國の兵士とか諸家の兵士といつたものを徵發する。即ち貴族の武力、古代貴族のものや牽いて追捕使が行くという形です。大きな反乱では、例えば将門の乱の場合も、征東大將軍藤原忠文が任命され、また副將軍も任命されます。併しそこに動かされた兵は東國在地の、例えば國々の兵とか東國の諸國の、將門と対抗するような地方豪族の軍事力、こういうものが動員されております。それに加えて若干部の武官を援用している。ということが十世紀段階の史料からわかるし、十一世紀になりましても、

追捕使乃至は追討使、それにプラス諸國兵士の徵用です。こういうあり方があります。有名な平氏常陸の乱の時をみましても、忠常は上総、下總あたりが本拠ですが、朝廷は甲斐守以下近くの諸國司に追討を命じています。はじめ平直方が追討使として行きますが、これはもと／＼檢非違使ですから中央から行く人です。しかし問題は、平直方から甲斐守の源賴信へ追討使の任務が代ります。これは何を意味するか、要するに追討使として國司の軍事力を重視したのかどうか、しかし、この場合、直方も賴信も都の武者であり、兵力は自分自身が率いて行く兵力は若干はいるでしょうが、多くは現地調遣をしている。それから、有名な前九年役、後三年役の内縁、ここでも地方へ陸奥守兼鎮守府將軍という形で源賴義が派遣されますが、これもその動いた兵力はいわゆる國司の軍隊と地方豪族の軍が協力している。こういう形であります。

ところが、十二世紀今の問題のあたりになりますと、中央軍は國司が組織する武力が期待されるという面もあるし、場合によっては親征軍であるものが臨時動員されるということもあります。更にいえば、今の正盛・忠盛のような私兵軍団が中央軍の機能らしきものを。彼らは、平氏の私兵を内容とするけれども、追討の宣旨や院宣をえ、それによつて公的な軍事力となるわけです。たゞ彼らは國司としての組織力、それから都の武者が公的軍制にとり入れられる、こういう側面も勿論あります。しかしそれが、忠

盛の自衛師進討のようは大規模なものになりますと、私兵軍団アラス諸国兵士ということになる。ここをもつと考えるためには、治承以後の内乱における兵力の動きを要しない結論は出せませんが、少くとも十二世紀になると、それまでにみられないような機能をもつた、私が純粋な意味の中央軍といっているものが明瞭になると思います。

即ち簡軍にまとめますと、これまでは地方の諸国における反乱とか海賊の鎮圧の場合は、中央政府が当該国司或いは近隣諸国の国司に命じて進討させる。これが最も普通である。この場合に動員されるのは諸国の兵士、地方軍の集団であります。また、特に大規模な反乱、例えば平家等の乱の場合などでは、中央から進討使が派遣され、これが兵力の増徴は戦場の諸国から徴募した兵士である。また同時に、今いったように甲斐守源賴信以下近隣諸国司に進討を命ずる。この両方の方式が重なり合っている場合は勿論あります。何れにしても結局は、地方軍事組織が反乱鎮定の主役として期待されているわけです。即ち、固定した中央軍が一つの集団として行くということはない。そういうものが事実上まだ存在しなかったのではないかと思います。ですから、この十一世紀段階まではいわずに軍事体制の上ではいわゆる地方分権主義でありたいところではないか。

ところが十二世紀に入りますと、要領の組織する武力

に頼る方法と並んで、親征軍である北面武士や院の侍などの都の武者が進討使の下で随時動員される。そういうことが先づ現われ、更に進討使の下に幾つかの武士団即ち傭兵集団ともいうべきもの、これが並列して動員される形態がみえはじめる。そして十二世紀半ばになりますと、鳥羽院政期になれば、その傭兵集団の主体が専ら平忠盛の私領武士団に固定してくる。こういう風に整理してよいのではないかと思います。

この平氏の私兵の内容とする武士団、これは出動に際して当然進討の宣旨や院宣を得て公的軍事力としての資格を得るわけですが、他の都の武者の集団をもその公的軍事力の中に包摂することが可能になる。他方では、平氏が国司として組織した武力、こういうにも合せる。そういうような形で進討の任務に従ったと思います。しかし、現実にはその中核はあくまでも平氏の私的武士団であり、それが集団として出陣し、また集団として凱旋する。私はこの集団として出かけて行き、集団として帰ってくることに注意しなければならぬと思っているわけです。この軍事力こそ一面では傭兵的な側面をもつところの中央政権の軍事力としての機能を果たしたわけです。まさに中央軍の体制が忠盛の時には出来上った。他のいい方をすると、鳥羽院政の下では、平忠盛の私的武力集団を内容とするところの中央軍の体制、これが出来上ったといえるのではないかと思うわけです。

この忠盛の私的武士団、これが果して中央軍的役割は、やがて清盛の時代に受けつがれます。一層強力なものと
して他の同様の武士団、例えげ、源為義とか義朝などの
武士団を圧制し、排除するということになるわけです。

このような中央軍編成、これがじまつたという点で、
私は鳥羽院政の軍事力体制或いはその時期における平忠
盛の軍事力の最も大きな特徴をみる事ができる。

もう一度申しますと、この時期の院政ならびに平忠盛
の存在によつて、中央軍編成が開始されたことが重要な
特徴であると思ひますし、さらにこれから後は可成りの
推定ですが、若しこれが初めての中央軍的軍事体制と
いうことになれば、その軍事体制に支えられてこそ鳥羽
法皇の専制政治が強力に展開され得たのである。このい
ふ風にも結論づけしてよいのではないかと思ひます。

大変まとまらないことで、また単に問題を提起したに
とどまりまして恐縮ですが、それに可成り危言ましたの
でお聞き苦しいところもあると思いますが、ご静聴有
難うございました。

(本稿は七月十四日の弘前大学国史研究会)

公開講演会の講演を筆記したもので、責任

は編集委員会にあります。

◆ 執筆者紹介

安田 元久 学習院大学教授

黒滝 十二郎 青森県立弘前中央高等学校教諭

橋本 正信 青森県立三戸高等学校教諭